

十三夜

樋口一葉

青空文庫

上

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと両親に出迎はれつる物を、今宵は辻より飛のりの車さへ帰して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの高声、いはば私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の欲さへ渴かねばこの上に望みもなし、やれやれ有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母様、ああ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊ばす物を、どの顔さげて離縁状もらふて下されと言はれた物か、叱かられるは必定太郎と言ふ子もある身にて置いて駆け出して来るまでには種々思案もし尽しての後なれど、今更にお老人を驚かしてこれまでの喜びを水の泡にさせます事つらや、寧ろ話さずに戻ろうか、戻れば太郎の母と言はれて何時々々までも原田の奥様、御両親に奏任の聲がある身と自慢させ、私さへ身を節儉れば時たまはお口に合ふ物お小遣ひも差あげられるに、思ふままを通して離縁とならば太郎には継母の憂き目を見せ、御両親には今までの自慢の鼻にはかに低くさせまして、人の思はく、弟の行末、ああこの身一つの心から出世

の真しんも止めずはならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人わがつまのもとに戻らうか、あの鬼の、鬼の良人つまのもとへ、ゑゑ厭いや厭いやと身をふるはす途端、よろよろとして思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の声、道ゆく悪太郎の悪戯いたづらとまがへてなるべし。

外なるはおほほと笑ふて、お父様とつさん私わたしで御座んすといかにも可愛かわゆき声、や、誰たれだ、誰れであつたと障子を引ひき明あけて、ほうお関せきか、何なにだなそんな処ところに立つてゐて、どうして又このおそくに出かけて来た、車もなし、女中も連れずか、やれやれま早く中へ這はい入れ、さあ這入れ、どうも不意に驚かされたやうでまごまごするわな、格子は閉めずとも宜よい私わしが閉める、ともかくも奥が好いい、ずつとお月様のさす方へ、さ、蒲団ふとんへ乗れ、蒲団へ、どうも畳が汚ないので大屋に言つては置いたが職人の都合があると云ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷ひてくれ、やれやれどうしてこの遅くに出て来たお宅うちでは皆お変りもなしかと例いっに替かへらずもてはやさるれば、針むしの席しろにのる様にて奥さま扱あひ情なくじつと涕なみだを呑のみ込こんで、はい誰れも時候の障さわりも御座りませぬ、私は申まを訳しのない御無沙汰してをりましたが貴君あなたもお母様つかさんも御機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いやもう私わは噓うそ一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道と言ふ奴を始めるがの、それも蒲団かぶつ

て半日も居ればけろけろとする病だから子細はなしさと元氣よく呵々々と笑ふに、亥之さ
んが見えませぬが今晚は何処へか参りましたか、あの子も替らず勉強で御座んすかと問へ
ば、母親はほたほたとして茶を進めながら、亥之は今しがた夜学に出て行きました、あれも
お前お蔭さまでこの間は昇給させて頂いたし、課長様が可愛がつて下さるのでどれ位心丈
夫であらう、これと言ふもやつぱり原田さんの縁引が有るからだとして宅では毎日いひ暮し
てゐます、お前に如才は有るまいけれどこの後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之
はあの通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出来まいと思
はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み
申て置いておくれ、ほんに替り目で陽氣が悪いけれど太郎さんは何時も悪戯をしてゐますか、
何故に今夜は連れてお出でない、お祖父さんも恋しがつてお出なされた物をと言はれて、
又今更にうら悲しく、連れて来やうと思ひましたけれどあの子は宵までひでもう疾うに寐
ましたからそのまま置いて参りました、本當に悪戯ばかりつのりまして聞わけとは少
しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内に居れば私の傍ばかり覗ふて、ほんにほ
んに手が懸つて成ませぬ、何故あんなで御座りませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中
に漲るやうに、思ひ切つて置いては来たれど今頃は目を覺して母さん母さんと婢女どもを

迷惑がらせ、煎餅やおこしの哆しも利かで、皆々手を引いて鬼に喰はずと威かしてでもるやう、ああ可愛さうな事をと声たてても泣きたきを、さしも両親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こんこんとして涙を襦袢の袖にかくしぬ。

今宵は旧暦の十三夜、旧弊なれどお月見の真似事に団子をこしらへてお月様にお備へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極りを悪るがつてその様な物はお止なされと言ふし、十五夜にあげななんだから片月見に成つても悪るし、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上る事が出来ななんだに、今夜来てくれるとは夢の様な、ほんに心が届いたのであらう、自宅で甘い物はいくらも喰べやうけれど親のこしらいたは又別物、奥様氣を取すてて今夜は昔しのお関になつて、見得を搆はず豆なり栗なり氣に入つたを喰べて見せておくれ、いつでも父様と噂すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位の宜い方々や御身分のある奥様がたとの御交際もして、ともかくも原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上に立つものはそれだけに苦勞が多く、里方がこの様な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心懸けもしなければ成るまじ、それを種々に思ふて見ると父さんだとて私だどて孫なり子なりの顔の見たいは当然なれ

ど、余りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿
 着物に毛繻子の洋傘さした時には見す見すお二階の簾を見ながら、呵お関は何をしてゐ
 る事かと思ひやるばかり行過ぎてしまひます、実家でも少し何とか成つてゐたならばお
 前の肩身も広からうし、同じくでも少しは息のつけやう物を、何を云ふにもこの通り、お
 月見の団子をあげやうにも重箱からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣
 ひが思はれると嬉しき中にも思ふままの通路が叶はねば、愚痴の一トつかみ賤しき身分を
 情なげに言はれて、本当に私は親不孝だと思ひます、それは成程和らかひ衣類きて手車
 に乗りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんにかうして上やうと思
 ふ事も出来ず、いはば自分の皮一重、寧そ賃仕事してもお傍で暮した方が余つぽど快よう
 御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、その様な事を仮にも言ふてはならぬ、嫁に行つた
 身が実家の親の貢をするなどと思ひも寄らぬこと、家に居る時は斎藤の娘、嫁入つては原
 田の奥方ではないか、勇さんの気に入る様にして家の内を納めてさへ行けば何の子細は無
 い、骨が折れるからとてそれだけの運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈、女などと言
 ふ者はどうも愚痴で、お袋などがつまらぬ事を言ひ出すから困り切る、いやどうも団子を
 喰べさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調製たものと見えるから十

分に喰べて安心させて遣つてくれ、余程甘からうぞと父親の滑稽を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴をなしぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩行して來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほど燦かならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心も付かざりしが、賀よりの言伝とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし処のあるは何か子細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、これやモウ程なく十時になるが関は泊つて行つて宜いのかの、帰るならばもう帰らねば成るまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様私は御願ひがあつて出たので御座ります、どうぞ御聞遊してときつとなつて畳に手を突く時、はじめの一トしづく幾層の憂きを洩しそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田へ帰らぬ決心で出て参つたので御座ります、勇が許して参つたのではなく、あの子を寐かして、太郎を寐かしてつけて、最早あの顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承諾せぬほどのあの子を、欺して寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母様、察して下さりませ私は今日まで遂ひに原田の身に就いて御

耳に入れました事もなく、勇と私との中なかを人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度ちたびも百も度もも考へ直して、二年も三年も泣なき尽つくして今日といふ今日どうでも離縁もろを貰もろふて頂かうと決心ぼぞの臍はらをかためました、どうぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人で置いて下さりませとわつと声たてるを嘔かみしめる襦袢の袖、墨絵の竹も紫竹しちくの色にや出いつと哀れなり。

それはどういふ子細でと父も母も詰寄つて問かかるに今までは黙つてゐましたれど私の家うちの夫婦めをとさし向ひを半日見て下さつたら大底が御解りに成ませう、物言ふは用事のある時けんどんに申まをつけられるばかり、朝起まして機嫌をきけば不ふ図と脇わきを向ひて庭の草花を態わざとらしき褒ほめ詞ことば、これにも腹はたてども良人おとこの遊ばす事なればと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あさはんあがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それはまだまだ辛棒もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑おさげすみなさる、それは素もとより華族女学校の椅子いすにかかつて育つた物ではないに相違なく、御同僚の奥様がたの様にお花のお茶の、歌の画のと習ひ立てた事もなければその御話しお話しの御相手は出来ませぬけれど、出来ずは人知れず習はせて

下さつても済むべき筈、何も表向き実家の悪るいを風ふうちやう聴きなされて、召使せんひの婢女めんなどもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は関や関やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと言ふ物はまるで御人が変りました、思ひ出しても恐ろしい御座ります、私はくら暗やみの谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か串談じやうだんに態わざとらしく邪慳じゃけんに遊ばすのと思ふてをりましたけれど、全くは私に御飽あきなされたのでこうもしたら出てゆくか、ああもしたら離縁をと言ひ出すかと苦いぢめて苦めて苦め抜くので御座りましょ、御父様も御母様も私わたしの性分は御存じ、よしや良人が芸者狂くるひなさらうとも、困こい者して御置おきなさらうともそんな事に愠りん氣する私でもなく、侍婢せんどもからそんな噂うわさも聞えまするけれどあれほど働はたらきのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他処よそ行ゆきには衣類めしものにも氣をつけて氣に逆さからはぬやう心がけておりますに、唯ただもう私の為する事としては一から十まで面白くなく覺しめし、筈はずの上げ下おろしに家の内の楽しくないは妻が仕方が悪るいからだと仰おつしやる、それもどういふ事が悪い、此処ここが面白くないと言ひ聞かして下さる様ならば宜けれど、一筋につまらぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはば太郎の乳母うばとして置いて遣つかはすのと嘲あざけつて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあ

の御方は鬼で御座りまする、御自分の口から出てゆけとは仰しやりませぬけれど私がこの様な意久地なしで太郎の可愛さに気が引かれ、どうでも御詞に異背せず唯々と御小言を聞いておりますれば、張も意気地もない愚うたらの奴、それからして気に入らぬと仰しやりまする、さうかと言つて少しなりとも私の言条を立てて負けぬ氣に御返事をしましたらそれを取てに出てゆけと言はれるは必定、私は御母様出て来るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとて夢さら残りをしいとは思ひませぬけれど、何にも知らぬあの太郎が、片親に成るかと思ひますると意地もなく我慢もなく、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛棒してをりました、御父様、御母様、私は不運で御座りますとて口惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を談れば両親は顔を見合せて、さてはその様の憂き中かと呆れて暫時いふ言もなし。

母親は子に甘きならひ、聞く毎々に身にしみて口惜しく、父様は何と思し召すか知らぬが元来此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの学校がどうしたのと宜くも宜くも勝手な事が言はれた物、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしかに日まで覚えてゐる、阿閔が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝の事であつた、旧の猿楽町のあの家の前で御隣の小娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛

つた原田さんの車の中へ落たとつて、それをば阿闍が貰ひに行きしに、その時はじめて見たとか言つて人橋かけてやいやいと貰ひたがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んで置ませず、支度とても唯今の有様で御座いますからとて幾度断つたか知れはせぬけれど、何も舅姑のやかましいが有るでは無し、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引取つてからでも充分させられるからその心配も要らぬ事、とかくくれさへすれば大事にして置かうからとそれはそれは火のつく様に催促して、此方から強請た訳ではなけれど支度まで先方で調べて謂はば御前は恋女房、私や父様が遠慮してさのみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れてでは無い、これが妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まんなら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入しても差つかへは無けれど、彼方が立派にやつてゐるに、此方がこの通りつまらぬ活計をしてゐれば、御前の縁にすがつて聲の助力を受けもするかと他人様の処思が口惜しく、瘦せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に尽して、平常は逢いたい娘の顔も見ずにゐます、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出来るの出来ぬのと宜くそんな口が利けた物、黙つてゐては際限もなく募つてそれはそれは癖に成つてしまひます、第一は婢女どもの手

前奥様の威光が削そげて、末には御前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立るにも母様ははさんを馬鹿にする気になられたら何とします、言ふだけの事はきつと言ふて、それが悪いと小言をいふたら何の私にも家が有ますとて出て来るが宜からうでは無いか、実ほんに馬鹿々々しいとつてはそれほどの事を今日が日まで黙つてゐるといふ事が有ります物か、余あんまり御前おとなが温順おとなし過るから我わがまま儘ままがつのられたのである、聞いたばかりでも腹が立つ、もうもう退ひけてゐるには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟おとともあればその様な火の中にじつとしてゐるには及びぬこと、なあ父様ととさん一遍勇ゆうさんに逢あつて十分油を取つたら宜う御座りましよと母は猛たけつて前後もかへり見ず。

父親てておやは先さきほど刻ときより腕ぐみして目を閉ぢて有けるが、ああ御袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我わしさへ始めて聞いてどうした物かと思案おせきにくれる、阿闍あせきの事なれば並大底でこんな事を言ひ出しさうにもなく、よくよく愁うれらさに出て来たと見えるが、して今夜は聳こどのは不在るすか、何か改たまつての事件でもあつてか、いよいよ離縁するとも言はれて来たのかと落おついて問ふに、良人おつとは一昨日おととひより家へとては帰られませぬ、五日六日と家を明けるは平常つねの事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際でぎはに召物そくの揃そろへかたが悪いとて如何いかほど詫わびても聞入れがなく、其品それをば脱だいで擲たきつけて、御自身洋服にめしかへて、吁ああ、

私位不仕合の人間はあるまい、御前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊しました、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、稀々言はれるはこの様な情ない詞をかけられて、それでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔おし拭つてゐる心か、我身ながら我身の辛棒がわかりませぬ、もうもうもう私は良人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔しと思へばそれまで、あの頑是ない太郎の寝顔を眺めながら置いて来るほどの心になりましたからは、もうどうでも勇の傍に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私の様な不運の母の手で育つより継母御なり御手かけなり氣に適ふた人に育てて貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々あの子の為にも成ませう、私はもう今宵かぎりどうしても帰る事は致しませぬとて、断つても断てぬ子の可憐さに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居愁らくもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿閑の顔を眺めしが、大丸鬚に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか調ふ奥様風、これをば結び髪に結ひかへさせて綿銘仙の半天に襷掛けの水仕業さする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一端の怒りに百年の運を取はずして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの斎藤主計が娘に戻らば、

泣くとも笑ふとも再度^{ふたたび}原田太郎が母とは呼ばるる事成るべきにもあらず、良人^{おとと}に未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくは離れていよいよ物をも思ふべく、今の苦勞を恋しがる心も出づべし、かく形よく生れたる身の不^{ふし}幸^{やせ}、不相応の縁につながれて幾らの苦勞をさす事と哀れきの増れども、いや阿闍こう言ふと父が無慈悲で汲取^{くみと}つてくれぬの思ふか知らぬが決して御前を叱^しかるではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方^{こちら}は真^まから尽す気でも取りやうに寄つては面白くなく見える事もあらう、勇さんだからとてあの通り物の道理を心得た、利発の人ではあり随分学者でもある、無茶苦茶にいぢめ立る訳ではあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕^{はたらきて}家などと言はれるは極めて恐ろしい我まま物、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内^{うち}へ帰つて当りちらされる、的に成つては随分つらい事もあらう、なれどもあれほどの良人を持つ身のつとめ、区役所がよひの腰弁当^{かま}が釜の下を焚^たきつけてくれるのとは格が違ふ、随^{した}がつてやかましくもあらうむづかしくもあらうそれを機嫌の好い様にととのへて行くが妻の役、表面^{うわべ}には見えねど世間の奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世の勤めなり、殊^{こと}にはこれほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口広い事は言へど亥之が昨今の月給に有ついたも必^{ひつき}竟^{やう}は原

田さんの口入れではなからうか、七光どころか十光とひかりもして間接よそながらの恩を着ぬとは言はれぬに愁つらからうとも一つは親の為おとと弟の為、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、これから後ごとて出来ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜よいか、太郎は原田のもの、其方そちは斎藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ関さうでは無いか、合点がてんがいつたら何事も胸に納めて、知らぬ顔に今夜は帰つて、今まで通りつつしんで世を送つてくれ、お前が口に出さんととも親も察する弟も察する、涙は各自てんでに分わけて泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿関はわつと泣いてそれでは離縁をといふたも我ままで御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬ様にならばこの世に居たとて甲斐かひもないものを、唯目ただの前の苦をのがれたとてどうなる物で御座んせう、ほんに私さへ死んだ気にならば三方四方波風たたず、ともあれあの子も両親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思よりひ寄よりまして、貴君にまで嫌いやな事を御聞かせ申まをしました、今宵限り関はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく当る位百年も辛棒出来さうな事、よく御言葉も合点が行きました、もうこんな事は御聞かせ申ませぬほどに心配をして下さりますなとて拭ふあとから又涙、母親は声たてて何といふこの娘こは不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ

月も折から淋しくて、うしろの土手の自然生を弟の亥之が折て来て、瓶にさしたる薄の穂の招く手振りも哀れなる夜なり。

実家は上野の新坂下、駿河台への路なれば茂れる森の木のした暗侘しけれど、今宵は月もさやかなり、広小路へ出れば昼も同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路ゆく車を窓から呼んで、合点が行つたらともかくも帰れ、主人の留守に断なしの外出、これを咎められるとも申訳の詞は有るまじ、少し時刻は遅れたれど車ならばつひ一ト飛、話しは重ねて聞きに行かう、先づ今夜は帰つてくれとて手を取つて引出すやうなるも事あら立じの親の慈悲、阿関はこれまでの身と覚悟してお父様、お母様、今夜の事はこれ限り、帰りまするからは私は原田の妻なり、良人を誹るは済みませぬほどにもう何も言ひませぬ、関は立派な良人を持つたので弟の為にも好い片腕、ああ安心なと喜んでゐて下されば私も何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不了簡など出すやうな事はしませぬほどにそれも案じて下さりませぬ、私の身体は今夜をはじめに勇のものだと思ひまして、あの人の思ふままに何となりして貰ひましょ、それではもう私は戻ります、亥之さんが帰つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、この次には笑ふて参りまするとて是非なささうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿河台まで何程でゆ

くと門かどなる車夫に声をかくるを、あ、お母様それは私がやります、有がたう御座んした
と温順おとなしく挨拶して、格子戸かうしどくぐれば顔そでに袖、涙をかくして乗り移る哀れさ、家うちには父が
咳せきばら払ひのこれもうるめる声成なりし。

下

さやけき月に風のおと添ねひて、虫の音たえだえに物がなしき上野へ入りてよりまだ一町
もやうやうと思ふに、いかにしたるか車夫はびつたりと轆かぢを止めて、誠に申かねましたが
私はこれで御免を願ひます、代は入りませぬからお下りおなすつてと突だしぬけ然にいはれて、思
ひもかけぬ事なれば阿閼は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るでは
ないか、少し急ぎの事でもあり増しは上げやうほどに骨を折つておくれ、こんな淋しい処
では代りの車も有るまいではないか、それはお前人困らせといふ物、愚図らずに行つてお
くれと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが欲しいと言ふのでは有ませぬ、私からお願
ひですどうぞお下りなすつて、もう引くのが厭いややに成つたので御座りますと言ふに、それ
ではお前加減でも悪るいか、まあどうしたと言ふ訳、此処ここまで挽ひいて来て厭いややに成つたで

は済むまいがねと声に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もうどうでも厭やに成つたのですからとて提燈ちようちんを持しまま不図脇わきへのがれて、お前は我ままの車夫くるまやさんだね、それならば約定きめの処までとは言ひませぬ、代りのある処まで行つてくれればそれでよし、代はやるほどに何処かそこ 処らまで、切めて広小路までは行つておくれと優しい声にすかす様にいへば、なるほど若いお方ではありこの淋しい処へおろされては定めしお困りなさりませう、これは私が悪う御座りました、ではお乗せ申ませう、お供を致しませう、さぞお驚きなさりましたろうとて悪者わるらしくもなく提燈を持かゆるに、お関もはじめに胸をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の瘦やせぎす、あ、月に背そむけたあの顔が誰たやらで有つた、誰れやらに似てゐると人の名も咽のどもと元まで転ころがりながら、もしやお前さんとは我知らず声をかけるに、ゑ、と驚いて振あふぐ男、あれお前さんはあのお方では無いか、私をよもやお忘れはなさるまいと車より濔すべるやうに下りてつくづくと打まもれば、貴嬢あなたは齋藤の阿関さん、面目も無いこんな姿なりで、背後うしろに目が無ければ何の気もつかずにいました、それでも音声ものごゑにも心づくべき筈はずなるに、私は余程よつほどの鈍鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿関は頭つむりの先より爪つま先まへまで眺めていゑいゑ私だとして往来で逢きあふた位ではよもや貴君あなたと気は付きますまい、唯たつた今の先までも知らぬ他人の車夫くるまやさん

とのみ思ふてゐましたに御存じないは、あたりまへ当然、もつたい勿体ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まあ何時いつからこんな業ことして、よくそのか弱い身に障りもしませぬか、伯母さんが田舎へ引取られてお出いでなされて、小川町のお店みせをお廃やめなされたといふ噂うわさは他よそ処ながら聞いてもゐましたれど、私も昔しの身でなければ種々いろいろと障る事があつてな、お尋ね申すは更なること手紙あげる事も成ませんでした、今は何処に家を持つて、お内儀かみさんも御健勝おまめか、小児ちっさいのも出来てか、今も私は折ふし小川町の勸工場くわんこうば見物みに行ゆきまする度々たびたび、旧のお店がそつくりそのまま同じ烟草店たばこみせの能登のとやといふに成つてゐまするを、何時通つても覗のぞかれて、ああ高坂かうさかの録ろくさんが子供であつたころ、学校の行返ゆきもとりに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしい吸立てた物なれど、今は何処に何をして、気の優しい方なればこんなむづかしい世にどのやうの世渡りをしてお出いでならうか、それも心にかかりまして、実家へ行く度に御様子ごようすを、もし知つてもゐるかと思ひては見まするけれど、猿楽町ざるがくちやうを離れたのは今で五年の前、根つからお便りを聞く縁がなく、どんなにお懐なつかしい御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手拭てぬぐふて、お恥かしい身に落おちまして今は家うちと言ふ物も御座りませぬ、寐処みどころは浅草町の安宿、村田といふが二階に転がつて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで挽く事もありますし、

厭やと思へば日がな一日ごろごろとして烟けぶりのやうに暮してゐます、貴嬢あなたは相変らずの美くしき、奥様にお成りなされたと聞いた時からそれでも一度は拝む事が出来るか、一生の内うちに又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやうに願ふてゐました、今日までは入用いりようのな命と捨て物に取あつかふてゐましたけれど命があればこそその御対面、ああ宜く私わたくしを高坂の録ろくのすけ之助と覚えてゐて下さりました、辱かたじけなう御座りますと下を向くに、阿関はさめざめとして誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな。

してお内儀かみさんとは阿関の問へば、御存じで御座りましよ筋向ふの杉田やが娘、色が白しろいとか恰かつ好かうがどうだとか言ふて世間の人は暗やみ雲くもに褒めたてた女もので御座ります、私が如い何かにも放蕩のらをつくして家へとては寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだらと親類の中の解らずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へらと無茶苦茶に進めたてゐる五月蠅うるささ、どうなりと成れ、成れ、勝手に成れとてあれを家へ迎へたは丁度貴嬢が御懐妊だと聞きました時分の事、一年目には私が処にもお目出たうを他人ひとからは言はれて、犬張子や風車を並べたてゝ成りましたけれど、何のそんな事で私が放蕩のらのやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら気が改まるかとも思ふてゐたのであらうなれど、たとへ小町と西施せいしと手を引いて来て、衣そ

とほりひめ
通姫が舞ひを舞つて見せてくれても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て発、心が出来ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み尽して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の処に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて実家へ戻したまま音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、その子も昨年の暮チプスに懸つて死んださうに聞きました、女はませな物ではあり、死ぬ際には定めし父様とか何とか言ふたので御座りましょう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話にも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我ままの不調法、さ、お乗りなされ、お供をしまする、さぞ不意でお驚きなさりましたろう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が楽しみに轆棒をにぎつて、何が望みに牛馬の真似をする、錢を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何もかも悉皆厭やで、お客様を乗せやうが空車の時だらうが嫌やとなると用捨なく嫌やに成まする、呆れはてる我まま男、愛想が尽きるでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますと進められて、あれ知らぬ中は仕方もなし、知つて其車に乗れます物か、それでもこんな淋しい処を一人ゆ

くは心細いほどに、広小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行ませうとお関は小褻少し引あげて、ぬり下駄のおとこれも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘れられぬ由縁のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋の一人息子、今はこの様に色も黒く見られぬ男になつてはゐれども、世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前だれがけ、お世辞も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さてもさてももの替り様、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子はまるで人間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟りでもあるか、よもや只事では無いとその頃に聞きしが、今宵見れば如何にも浅ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私はこの人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に行々はその店の彼処へ座つて、新聞見ながら商ひするのと思ふてもゐたれど、量らぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入られやう、烟草屋の録さんにはと思へどそれはほんの子供ごころ、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な恋なるを、思ひ切つてしまへ、思ひ切つてしまへ、あきらめてしまはうと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、その際までも涙がこぼれて

忘れかねた人、私が思ふほどはこの人も思ふて、それ故の身の破滅かも知れぬ物を、我がこの様な丸鬚などに、取済したる様な姿をいかばかり面にいく思はれるであらう、夢さらさうした楽らしい身ではなけれどもと阿関は振かへつて録之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿関に向つてさのみは嬉しき様子も見えざりき。

広小路に出れば車もあり、阿関は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失礼なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかつて何か申たい事は沢山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私は御別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬ様に、伯母さんをも早く安心させておあげなさりました、蔭ながら私も祈ります、どうぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります所を見せて下され、左様ならばと挨拶すれば録之助は紙づつみを頂いて、お辞儀申す筈なれど貴嬢のお手より下されたのなれば、あり難く頂戴して思ひ出にしまする、お別れ申すが惜しいと言つてもこれが夢ならば仕方のない事、さ、お出なされ、私も帰ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なささうの塗り下駄のおと、村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日16刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文藝俱樂部・臨時増刊閨秀小説」博文館

1895（明治28）年12月10日

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「十三夜」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※送りがな、振りがなの不統一は、底本通りです。

※底本巻末の三好行雄による注解は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：Julki

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十三夜

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>